

博覧会場の街並みは、まずメインイベント会場となるセンターゾーンを取り囲むように、周長2.6kmのグローバルループがブリッジ状に浮かび、空中回廊の様相を呈している。特に柱脚部分の形態は地上の一点から数本の柱が扇状に伸びており、浮揚感のあるイメージを構造体自体をデザインする事により表現している点に関心した。さらにそれは、グローバルコモンと呼ばれる6つの公式参加国のクラスターを結びつけ、言わば環状線の役割を果たしている。ゴンドラを含めたこれらの交通網がグローバルコモンや企業パビリオン、センターゾーンの主要要素を結びつけ、起伏に富んだ地形にバランス良くゾーニングする事によって、変化に富んだ一種のランドスケープを形成しているように感じた。

一見、起伏に富んだ地形では会場内のバリアフリー計画が困難な様に感じるが、グローバルループの設置によって、それを解消しているだけでなく、広い会場を上から見渡せるなど、来場者にとっての分かりやすさにも繋がっているのではないだろうか。

さらに街並みといった観点から細かな所に目をやると、各国のパビリオンの多くはファサードにその国ゆかりのマテリアルをまとったデザインが多く見られ、パビリオン全体で各国の表情を形成しており、街並みを豊かにしているように感じた。

最後に“自然との共生”をテーマとした街づくりのあり方というものを考えていかなければならない時期に来ているのではないかと、この博覧会を通して痛感した。そして、その一つの街としてのあり方が今ここにあるのではないだろうか。

